

調査月報

【家電】急拡大する DVD レコーダー需要

DVD レコーダーの需要が急拡大している（図）。主要マーケットである国内の出荷台数は、99 年末の登場後しばらくは伸び悩んだものの、2002 年度には 82 万台、2003 年度は 9 ヶ月で 170 万台と、ここに来て勢いを加速させている。

これは、DVD レコーダーが、そもそも VTR など競合製品に比べて録画映像の画質劣化がないなどの利点があるうえ、ここに来て商品力が一段と高まったことが大きい。まず、価格面では、当初は競合製品に比べて 5～10 倍もの高価格であったが、足許では量産効果や部品点数の削減などにより 3～5 倍まで縮めている。機能面でも、ハードディスクドライブ搭載により、テレビ放送を好きなだけ録画し、必要に応じて DVD にダビングし、長期保存するなど利便性が高まった。さらに、複数規格に対するユーザーの不安が徐々に払拭されつつあることも見逃せない。DVD レコーダーでは 3 種類の録画方式が並存し、これを嫌って購入を手控えるユーザーも少なくなかった。しかし、2003 年には複数規格に対応した製品が発売され、規格並存による不利益をある程度回避できるようになっている。

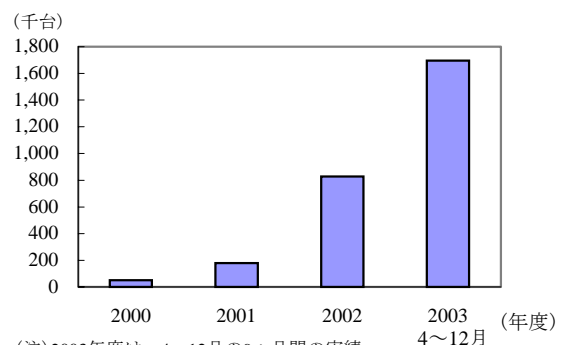
今後も、DVD レコーダー需要は、商品力向上を背景に、国内外で拡大傾向を辿る公算が大きい。将来的にはハイビジョン放送の録画で優れる次世代機への世代交代が予想されるが、同放送を送受信するための環境が整備されるまでしばらく時間を要するため、DVD レコーダーは、少なくとも

この先 3～5 年は「録画再生機の本命」として存在感を増していこう。もともと、参入メーカーの収益環境は厳しくなっていく公算が大きい。DVD レコーダー市場では、わが国メーカーが、技術開発で先行して逸早く製品化に乗り出したことから世界シェア 9 割超を握るものの、これまで研究開発投資が嵩み、足許の収益性は低水準にとどまっている模様だ。しかも今後は、韓国・中国メーカーなどの新規参入により価格競争の激化が予想されるうえ、中期的には次世代機の研究開発が大きな課題となり、その投資負担も少なからず重荷となるからだ。

こうしたなか、わが国メーカーには、収益環境が悪化する前に投資回収と次世代機の開発費用を確保すべく、世界供給体制の逸早い構築やコスト競争力の強化がポイントとなる。とりわけコスト競争力では、原材料費の低減や生産効率の向上はもとより、開発投資の回収を早めるために基幹部品の外販に踏み切るなど、「先行逃げ切り」を意識した戦略が求められよう。

（2.23 平野 剛士）

図：DVD レコーダーの国内出荷台数の推移



（注）2003年度は、4～12月の9ヵ月間の実績。

（資料）（社）電子情報技術産業協会資料などをもとに当室作成